口腔がんによる下顎骨浸潤の評価における
MRI-3D 撮像法を用いた顎骨断面再構成画像の有用性に関する研究

研究対象：

2008 年 10 月～2014 年 3 月までの間で、国立がん研究センター東病院において口腔がんと診断され、下顎骨への浸潤が疑われ MRI によって検査を受け、治療が行われた方々の画像情報を対象とします。

研究の概要：

世界の統計によると、頭頸部に生じるがんのうちで、口腔がんで約 50%を占めています。特に下顎骨（顎の骨）へがんが浸潤してしまった場合には、口腔のがん病巣と同時に、がんに侵された下顎骨も切除する手術が行われています。不幸にも下顎骨を大きく切除する必要がある場合には、別の骨や筋組織などを移植する再建が行われますが、食事の時の咀嚼機能が著しく損なわれてしまうことがあります。下顎骨を切除する範囲や術式の決定には、画像検査によって腫瘍の進展度を正確に診断することが必要です。その画像診断の中心として CT と MRI 検査が用いられていますが、その診断能はまだ十分とはいえませんでした。

当センターでは 2008 年 4 月より 3 テスラ MRI という高磁場強度の MR 装置が稼動し、臨床の場において活用されています。これは、高磁場によって高い分解能を有する画像情報が取得可能で、近年のコイルの発達や，各種撮像法の開発により，頭頸部領域では圧倒的に有利とされています。特に、アプリケーションの進歩により 3D 撮像法にて 3 次元データ収集を行って後から任意断面を作成することが可能となりました。我々は、それらを有効に活用することで、口腔がんの下顎骨への浸潤をより正確に診断することができるのではないかと考えています。

本研究では、下顎骨浸潤の評価において、3 テスラ MRI による 3D 撮像法の有用性を検討することを目的としています。

研究の意義：

この CT 装置により診断能の向上が見込めれば、口腔がんのがん根治性と機能温存の両方を考慮した適切な術式の選択に寄与できるという点で重要な意義があります。

目的：

口腔がんによる下顎骨への浸潤評価において、3D 撮像法による MRI 画像の有用性の検討をおこないます。

方法：

口腔がんに対して、MRI による画像の評価を行い、通常の 2D 撮像法と 3D 撮像法による下顎骨断面像のどちらが下顎骨への腫瘍浸潤の診断能が優れているかを調べます。結果的に手術治療が行われた患者さんに対して、画像診断が病理診断とどの程度一致するのか併せて評価いたします。

個人情報保護に関する配慮：

MR 画像情報の閲覧は個人情報を伴いますが、研究に用いる際には、個人情報保護の担当者が責任を持って匿名化した上で検討を行います。対象患者の方々の識別は研究目的に特に割り振られた研究番号を使って管理し、個人情報が院外に出ることはありません。また、このホームページにおいて研究について公開し、問い合わせ等に応じて、患者さん等からのご希望があれば、その方の診療録や画像情報は研究に利用しないようにします。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

〒277-8577 柏市柏の葉 6-5-1
国立がん研究センター東病院　放射線診断科　関谷浩太郎
TEL 04-7133-1111/FAX 04-7131-4724（内線 91311）